様式B（マニュアル様式）

政務活動報告書

令和６年6月16日

〔　会派　喜働　〕

代表者氏名	川合　滋	記録者氏名	足立　淑絵
活動者氏名	川合　滋　　幸松孝太郎　　足立淑絵		
活動日	令和６年５月８日（水）～令和６年５月10日（金）		
活動先	・一般財団法人　松本ヘルスラボ、中島屋降籏米穀 ・三重テラス運営統括 ・東京大学　高齢社会総合研究機構 ・国際ウェルネスツーリズムEXPO、観光DX・マーケティングEXPO		
活動目的	・一般財団法人　松本ヘルスラボ　：　健康産業創出事業 ・中島屋降籏米穀　：　BG無洗米の精米所見学と3つのチャレンジ ・三重テラス運営統括　：　第3ステージと「つながりづくり」部活動 ・東京大学　高齢社会総合研究機構　：地域活力があり、多様性のある超高齢化社会の実現 ・国際ウェルネスツーリズムEXPO、観光DX・マーケティングEXPO		

名張市議会
受
6.6.17
第　号

★一般財団法人　松本ヘルスラボ
・松本ヘルスラボ　事務局長　　降旗克弥様
・松本市産業振興部　商工課　健康産業推進担当　　課長補佐　塩入　明様
・株式会社　中島屋降籏米穀　代表取締役社長　　降籏　一路様
・株式会社　中島屋降籏米穀　総務部長　　田中孝男様

○松本市は健康長寿延伸都市
・平成25(2013)年3月14日に宣言
・「健康長寿延伸都市・松本」の創造のため、健康を核に、経済、産業、観光、教育、環境、都市基盤など、様々な分野を連携し、「心と体」の健康づくりと「暮らし」の環境づくりを一体的に進めている。
・市民の健康づくりとともに、社会課題の解決による産業創出を目指す。

○一般社団法人　松本ヘルスラボ
・「明るく、楽しく、元気よく」健康づくりに取り組み、社会の一員としてやりがいを持っていただける機会を市民の皆様に提供している。

(1)健康づくりに関心のある市民の皆様へ
・定期的な健康チェック
・健康増進プログラムへの参加
・ラボオフィスの利用
・協賛店の利用割引
・開発中の製品の試用

(2)健康産業に関心のある企業の皆様へ
・共創の場(リビング・ラボ)の提供:健康ニーズの把握を支援
・実証の場(テストフィールド)の提供:テストマーケティングの支援
・相談の場の提供:専門機関とのコーディネート

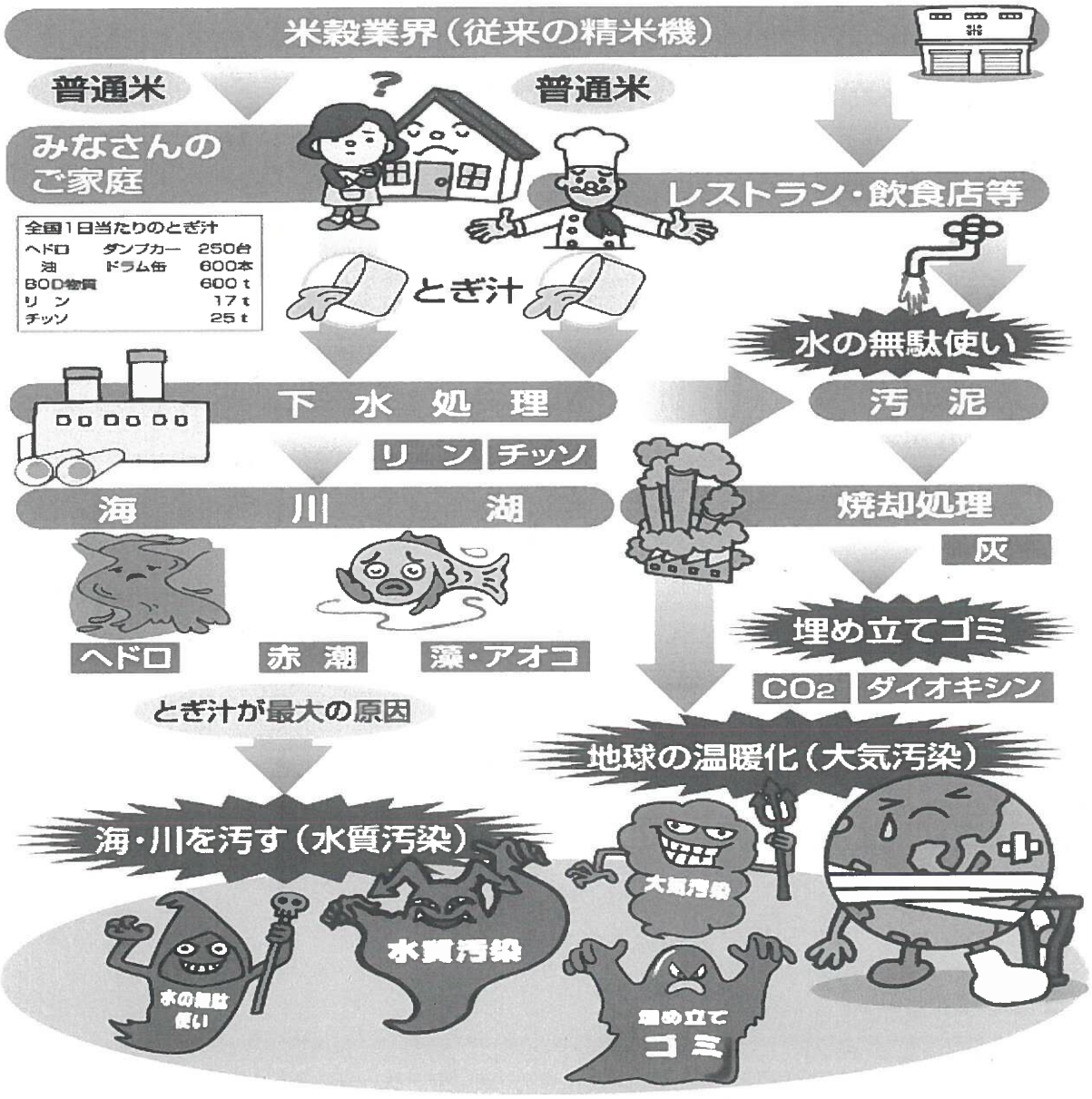
○松本ヘルスラボと共創の中島屋降籏米穀
・創業50周年
・地球環境の保全に取り組む尖兵(チャレンジ・カンパニー)として社会への貢献を目指す。
・米のとぎ汁による水環境汚染の防止として、BG無洗米の加工及び販売を進めている。
・松本ヘルスラボが実証研究支援、講演会・セミナーを行い、健康米の精米・販売・販路開拓に取り組む。
・精米は、2018年4月、東洋ライスの金芽米精米技術指導を受ける。
・販売先として、市民(会員向け販売)、スーパー、協賛飲食店、コンビニ、企業、学校の給食に導入。

○中島屋降籏米穀「3つの改革」にチャレンジ

1. 精米技術の改革　BG精米製法
玄米からとれた粘着ヌカを使い、うまみ層は傷つけずに肌ヌカだけをきれいに除去する。
「Bran」＝ヌカ＋「Grind」＝削る、研ぐ　BG精米製法

2. 玄米の生産方法の改革　自然循環型農業
無洗米の精米時に回収される肌ヌカから作られる「米の精」を田んぼに戻し、微生物の力をかりて土壌を甦らせる。根が強くて、茎が太い稲から健康でおいしいお米が収穫される。化学肥料に頼らない自然循環型農業。

3. 流通形態の改革　環境保全型流通
「米の精」で甦った田んぼから収穫される、こだわりの有機米を直接仕入れ、BG無洗米に加工する。生産者の顔が見える「愛を米」を消費者にお届けする地産地消を進めます。



◎所感◎

松本市の健康長寿延伸政策の１つとして、一般社団法人松本ヘルスラボが立ち上がり、健康産業創出を目指し中島屋降籏米穀が共創。環境に優しい循環型「BG無洗米：金芽米」に取組まれました。

その「BG無洗米：金芽米」は、東京農業大学の客員教授が研究発表したもので、健康にも貢献する米としても証明されたものです。

地元の企業が儲かり、法人税が増えて、まちが潤う循環に加えて、BG無洗米を食べて健康な方が増えて医療費が削減できる米は、高齢化社会の日本を救うものの1つと考えます。

名張市での導入を目指し、今後も調査を継続していきます。

★三重テラス運営統括

・三重県雇用経済部　首都圏営業拠点「三重テラス」　首都圏営業拠点運営統括監
　荒川　健様

○東京・日本橋と三重の縁

江戸時代、日本橋からはじまる東海道を歩き、伊勢神宮をめざす”お伊勢参り”は旅文化のゴールデンルート。さらには多くの伊勢商人が日本橋で成功をおさめ、今もなお老舗企業として軒を連ねるなど、日本橋と三重は文化・経済面で深いつながりがある。

○「三重テラス」概要

・三重の豊かな自然・歴史・文化・食など、さまざまな魅力発信と交流の場
・ショップ、レストラン、コワーキングスペースがあり、イベント開催でも集客する。
・三重県の本場の商品を適切な価格で届ける。
・地元の企業が足りない手土産を購入することもある。
・伊勢木綿のカーテンをレストランに使用
・第２ステージまでは、三重県を発信していた。
・平成25年９月の開設から10周年となる令和５年９月にリニューアルオープン。第3ステージが始まり、新たな機能やサービスを展開し、首都圏と三重の架け橋としてさらなる進化を目指す。

○第３ステージ「つながり作り」

・物販・飲食業務：株式会社伊勢福（赤福グループ企業）
・マネジメント業務：日本旅行・アインズ・淡味三重テラス運営共同事業体
・コミュニティを作るための場としてコワーキング機能を設置し、観光コンシェルジュやコミュニティマネージャー（人懐っこい感じの良いスタッフ）が常駐する。
・三重県まるごと体験を企画し、森づくりサポートセンターから、ヒノキのボールプールなどで子ども達が楽しめるイベント開催
・「三重テラス部活動」を始動。

○三重テラス部活動

・首都圏と三重県の様々な関係者の交流を促進する取り組みの一環。

・三重テラスの２階コミュニティスペースで、興味のあるテーマを設定して定期的・継続的に集うことで三重ファンのコミュニティ（仲間）づくりを目指す。

・第1弾として、「日本酒部」と「スイーツ部」が立ち上がる。

・第２弾として、「エシカル・アクション部」「みえみかん部」「アクティブレスト部（仮称）」が立ち上がる。

・三重に縁がある方、三重に興味がある方に無料で登録していただき、コワーキングスペースの利用促進。

◎所感◎

三重テラス第3ステージの運営事業者が変わり、レストランや売店では人懐っこい感じの良いスタッフの方が対応くださり、東京にいながら地方三重のような心安らぐ素敵な空間でした。

雰囲気という感覚的なものではありますが、その空間が居心地よかったり、スタッフの方の感じが良かったりすると、「また行きたい。」という気持ちになり、リピートに繋がると思います。

東京を始めとした都会は人が多く、情報が溢れ、常に変化し、刺激の多いところではありますが、その反面、心落ち着ける静かな場所は少なく、人は多いけれども知り合いと会える確率は低く孤独を感じやすい場所ではないかとも思います。

だからこそ都会でも人の温かさが感じられたり、心身共にホっとできたり、繋がりをつくれる場を提供することで、きっと人は集まってきて三重県のファンも増えるのではないかと思いました。地元まで足を運んでいただける流れができたら最高。今後の展開が楽しみです。

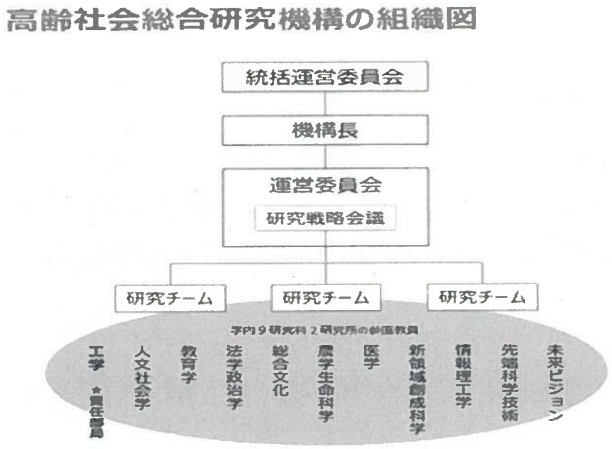
★東京大学　高齢社会総合研究機構

・東京大学　高齢社会総合研究機構（IOG）　機構長
　　未来ビジョン研究センター（IFI）教授　　医学博士　飯島　勝矢様

・東京大学　高齢社会総合研究機構　学術専門職員　　田中　康夫様

・飯田グループホールディングス　ファーストウッド株式会社
　　FWC 部　営業課　山口　浩一様

○今回視察する東京大学高齢社会総合研究機構（以下、IOG）の組織図と８つのテーマ



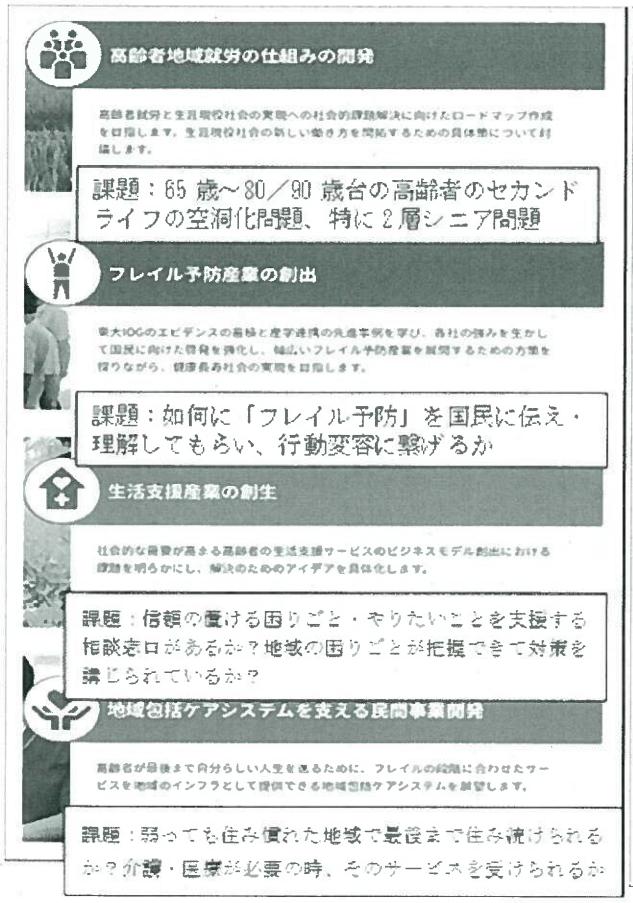
○飯島勝矢・機構長と田中康夫学術専門職員から

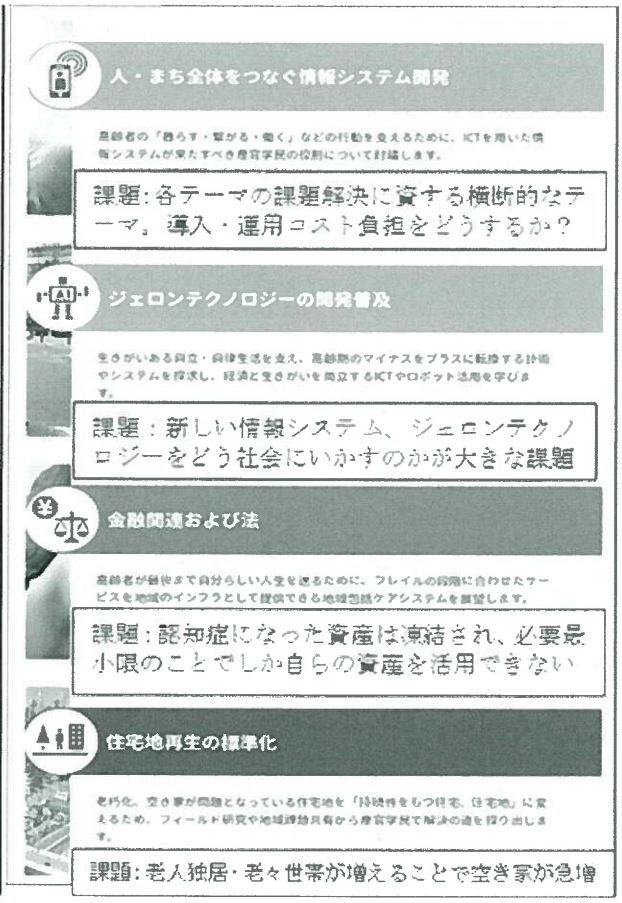
IOGの概要とジェントロジー・アカデミーの実践的なワークショップの説明

ジェロントロジー・アカデミーの学びは、座学とグループ討議を組み合わせたアクティブなプログラムで、毎月 8 つのテーマが提示する社会課題について、最先端の知をインプットした後、ワークショップで具体的なビジネスモデルを討議し、解決策を導き出している。

このプログラムで業種や分野の異なるメンバーと、企業内の教育研修とは異なる人材育成効果を期待できている。

＜高齢社会における８つのテーマについて説明＞





○飯島勝矢機構長と田中康夫学術専門職員の研究について

1. 飯島機構長

高齢者の健康で活動的な生活を支えるための研究を行っている。具体的には、医学、経済学、工学、社会学などの様々な学問領域からの研究者が協力し、高齢者の生活の質の向上を目指している。また、フレイル予防や地域包括ケアシステムについても研究しており、産官学民連携による取り組みが挙げられる。

2. 田中康夫学術専門職員

住宅地の再生まちづくりについて研究しており、将来の人口減少に対処するために、地域課題共有から住宅地の課題解決への道筋として、人口減少や高齢者就労、フレイル予防、多世代共生という視点を加味した総合的な取り組みが重要であることが挙げられている。

※これらの研究者は、高齢化社会における課題解決に向けて貢献しており、その成果は多くの自治体や社会全体の福祉向上につながっている。

○意見交換から得た所感

飯島勝矢・機構長と田中康夫学術専門職員の説明後の意見交換から、我が国の高齢化が進む社会において、多様な分野からのアプローチを通じて、高齢者の健康で活動的な生活を支えるための研究を行っていることが理解できた。

具体的には、医学、経済学、工学、社会学などの様々な学問領域からの研究者が協力し、高齢者の生活の質の向上を目指している。さらに、高齢化社会における政策提言や社会システムの改善、高齢者を取り巻く環境の整備など、実践的な解決策の提案を全国の自治体113団体等に行われており、高齢者だけでなく、社会全体の福祉の向上に貢献している。

様々な事例紹介は、説得力があり、さすがに医学博士としての自信と自負が感じられた。

この意見交換から得た所感を3点にまとめると、

1. 高齢者地域就労についての意見交換

① 本市の状況を次のように説明

名張市産業部は高齢者就労として、名張市シルバー人材センターの取り組みや無料相談を始めていますが、福祉子ども部における生涯現役社会の実現に向けた取り組みが必要。

② 飯島勝矢・機構長から

厚労省からの補助金事業である生涯現役地域づくり環境整備事業では、協議会を設置することが前提条件のため、名張市では協議会ができていない。そこで、地域の特性に応じた高年齢者の雇用・就業機会の創出に寄与する取り組みができている参考自治体として、IOGも関与している柏市を紹介したい。

当市では2016年から7つの団体で展開している協議会では「生きがい就労プロジェクト事業」などの成果を参考にして、地域の課題解決に貢献する事業モデルの創設や効果の提案が必要である。

2. フレイル予防と地域包括ケアシステムについての意見交換

① 本市の状況を次のように説明

平成17年度から行っている地域共生社会の実現に向けて15の地域づくり組織の有償ボランティアによる支え合い活動や地域包括支援センターのブランチとして15のまちの保健室による包括的な相談支援体制、専門人材であるエリアディレクターを加えた地域福祉教育総合支援システムは、全国でも先進的と言える仕組みが出来ている。

R6年度は、フレイル予防や地域包括ケアシステムの取り組み。保健事業と介護予防の一体的事業健康増進事業を実施している。

② 飯島勝矢・機構長から

健康長寿社会の実現に向けたエビデンスとして、産官学民連携によるフレイル予防の取り組みが挙げられた。具体的には、家庭内センサフュージョンを用いたフレイル検知技術の研究や、AIを活用した効果的なフレイル予防の基盤研究が進められている。

また、IOGと行政とが連携しての取り組みは、行政のトップである首長や部署の責任者が超高齢人口減少社会を乗り切るための課題解決をやることの本気度が重要であるとのアドバイスもいただいた。さらに、IOGの研究員も参加している高知県仁淀川町での「住民主体フレイル予防活動」の見学は、住民主体の原点を見ることが出来ると提案されたため、会派として検討していきたい。

3.住宅地の再生まちづくりについての意見交換

・田中氏から「典型的な郊外住宅団地の年齢別人口推移」データを説明しながら、特に将来の高齢者や後期高齢者の人口減少に対処するために、どうすればいいかでは、コンパクトシティの富山市や住宅を切り捨てた三木市の事例を参考にしてはどうかと指摘された。

・会派からは、本市のように関西から移住してきた高低差の大きい団地が多く、旧住民の地域とは自ずと地域差の考えが違うことの意見や、田中氏からは、将来の人口減少に対処するために、地域課題共有から住宅地の課題解決への道筋として、人口減少や高齢者就労、フレイル予防、多世代共生という視点を加味した８つのテーマに基づく総合的なまちづくり＝ジェントロジー産官連携の取り組みが重要であることが示され、事例として柏市の「柏プロジェクト」が挙げられ、今後の参考にしたい。

◎所感◎

今回の視察では、飯島勝矢・機構長と田中康夫学術専門職員からは、“会派喜働の市議の皆様がお悩みになっていることは、全国共通な課題と思う。市町村行政は何をやっていけばよいのか、悩んでいるのではないか。一番のネックは、行政の縦割りであることで、自治体の規模が大きいところの方が、連携がうまくいっていないと思う。

私たちが関与している某市では、まちづくりの課題を投げかけても「どこが所管するのか」「誰が首長に相談をするのか」から始まっているので、時間ばかりかかっている。そのうちに有耶無耶になり、既に5年ほど経過し、まちづくりに精力的に活動をしている住民の皆さんが無力感を感じ始めている”という話が特に印象に残っており、1時間30分という限られた時間ではあったがIOGについて深く学ぶことができたことは大変有意義な時間であった。

最後に、IOGのトップである機構長から一つ一つの説明や意見交換において親切丁寧に対応していただき、感謝を申し上げたい。

国際ウェルネスツーリズムEXPO、観光DX・マーケティングEXPO

★旅の力への原点回帰、つながり、再生、ウェルビーイングを手に入れる旅

『ウェルネスツーリズム』

国立大学法人　琉球大学　国際地域創造学部ウェルネス研究分野

ブルーゾーン沖縄研究センター　　教授　医学博士　　荒川　雅志氏

○ブルーゾーン沖縄研究センターとは

・日本アジアのウェルネス研究開発拠点

・ヘルス＆ウェルネスツーリズム研究開発拠点

・日本アジアの海洋療法研究拠点

・企業共同研究、受託研究、寄付件数　第１位（259社）

・自治体ウェルネス監修、委員参画など件数　第１位（45自治体）

・健康素材、商材のエビデンス獲得、まちづくり、健康経営など

○新しいウェルネスの定義

身体の健康、精神の健康、環境の健康、社会的健康を基盤に、豊かな人生をデザインしていく。(自己実現)

○これからの観光は、ただの観光地ではない・・・・。

・自分に“還る”場所、何度も“帰る”場所として旅を位置付ける。
・自然・人・地域とのつながりを創るツーリズム　＝　観光(旅)の新しい価値
・旅先を「日常の延長」へ。健康点検＆働き方・生き方再構築の場へ。
・ウェルネスライフ・スタイル　＋　ツーリズム

スロー志向	：	過去・現在・未来の再認識
健康志向	：	転地(効果)、保養(滋養)
環境共生、農的生活、地産地消食	：	原点回帰、地域回帰
自己開発	：	新しい視座“交流発見”“自己実現”

○“リジェネレーション”再生(再生可能持続可能性)

自然の再生(循環環境、共生)、地域の再生(コミュニティ力、課題解決、文化継承)
＋(プラス)
人の再生(健康・ウェルネス)

※　人の再生を起点に、自然、地域、地球共同体的視野醸成と行動実践(荒川 2024 年)

○リジェネラティブ・ウェルネス

これからの企業、地域、人は“3 つのつながり”と“3 つの再生”価値を提供していく。

人とのつながり・再生	：	ウェルビーイング、健康、ウェルネス
地域とのつながり・再生	：	循環経済、コミュニティ力、伝統文化継承、地域課題解決
自然とのつながり・再生	：	回復、再生、循環、エコシステム、再生農業林水産、里山里海

○リジェネラティブ・ツーリズム

・持続可能観光、SDGS の次の観光と云われる。
・再生観光
・訪れれば訪れる程、その地域が以前より良くなっていく次世代観光

○日本には“ウェルネス・ディスティネーション”が在る

ウェルネス・ディスティネーションとは
地域が持つ独自の資源などが活かされた様々な体験を通じて、ライフスタイルや生きがいにヒントが得られ、人生が豊かになる旅先地

○リジェネラティブ・ウェルネスツーリズム(荒川 2023 年)

・観光地は、観光者の再生という価値を提供(健康・ウェルネス)
・観光者も訪問地の自然、人、地域再生循環システムの役割を果たす。
※ 維持・保全は当たり前で、再生・創造まで果たして、次の世代に引き継ぐ。

○“第3の場”という価値を提供

・ファースト・プレイス　：　自宅など生活を営む場所
・セカンド・プレイス　：　職場や学校など長く時間を過ごす場所、生産性の場所
・サード・プレイス　：　快適で居心地がよい場所
ほどよい刺激と交流、発見、自己開発の場所
脱力できる、癒される場所
本来の自分を取り戻す場所など

○ウェルネス・サードプレイス

・自然　：　四季、温泉、山川海
・生活環境　：　空間、時間
・文化　：　和、伝統、現代
・食　：　固有、洗練

※単なる観光地ではない、従来の観光からの脱却。そこには自己発見、自己開発、自己実現ができる場、つながりの場、再生の場
～住む人と訪れる人の双方のウェルネス・サードプレイス～

○日本から世界に発信する最新のウェルネス・ツーリズム

・“祈り”“つながり”旅の本来価値への原点回帰
・八百万、祈り、自然、共生、つながり、再生
・アフターコロナ時代の新しい価値提案
・新しい働き方・生き方のヒントが日本にある。
※日本が本来的に有する、人・自然・地域共生の再構築

◎所感◎

日本人は世界一長寿の国民でありますが、健康長寿としてのランキングではありません。

世界保健機関（WHO）が発表した最新の統計によると、日本人の平均寿命は 84.3 歳で長寿世界一。統計を遡ることができる20年前から日本は長寿世界一の座を守り続けていますが、「健康寿命」を見ると平均寿命と健康寿命との差は 9.3 年で、調査が実施された世界 131 カ国中 60 位との報告もあります。

大切なのは長生きの中身、活き活きと輝く日々を過ごしながら長生きすること。長寿世界一を達成した日本の次なる課題として、生きがいある健康長寿をいかに達成するかが問われているのが、まさに今と考えます。

本来の日本には、発酵を中心としたヘルスフードの和食があり、季節を感じ世代を超えて着られる和服、心や体を整える禅、水の湧き出る泉や山・川・海など生活する上で大切な場所を守る神社の存在、自然も含めて生きとし生けるものへの畏敬を表す八百万の神々の存在、枯山水に表現される地球や宇宙が道（武道、華道、茶道など）から学べるように、日本には古くから存在する精神論や哲学が今なお、遺っています。

原点回帰できる場所が多く遺る日本は、これからの世界の気付きの場になる可能性があると感じました。

★フロー理論から考えるアウトドア・アクティビティ　～ツアーの楽しさとは何か？～

日本アドベンチャーツーリズム協議会　理事　山下真輝(JTB)

○フロー(英:flow)

フローとは、人間がその時していることに完全に浸り、精力的に集中している感覚に特徴づけられ、完全にのめり込んでいて、その過程が活発さにおいて成功しているような活動における精神的な状態をいう。

日本では、スポーツの分野において一般的に「ゾーン」と呼ばれることが多いが、類語としては「ピークエクスペリエンス」「無我の境地」「忘我状態」とも呼ばれる。心理学者のミハイ・チクセントミハイによって提唱され、その概念は、あらゆる分野に渡って広く論及されている。

○フローの構成要素

ジェーン・ナカムラとチクセントミハイは、フロー体験の構成要素を６つ挙げている。

① 専念と集中、注意力の限定された分野への高度な集中。
（活動に従事する人が、それに深く集中し探求する機会を持つ）

② 自己認識感覚の低下

③ 活動と意識の融合

④ 状況や活動を自分で制御している感覚。

⑤ 時間感覚のゆがみ － 時間への我々の主体的な経験の変更

⑥ 活動に本質的な価値がある、だから活動が苦にならない。(報酬系)

○フロー状態に入るツアーをつくる

・始まる前の雑談＆アイスブレーク(顧客のスキルを雑談で情報収集する。)

・自分のスキル+4％　頑張れば何とかなる位の目標が楽しみながら集中できる。
（スキルレベルと意識レベルが関係してくる。）

・体験に集中できるような環境を整える。
（携帯を置いてきてください。○○に集中してください。写真は、こちらで撮ります。後程、提供します。）

・過去の経験したことのない景色を見せる。

・退屈にさせないように気を配る。

・チームビルディングも交えると更に良い。

・自然解説や歴史解説で理解しやすくなり、満足度が上がる。
（知的フローを満たす。ストーリーが近い。）

◎所感◎

このセミナーで学んだことは、今までの外遊び・アウトドアの高品質化、意義向上に加えて、アウトドアガイドの地位向上が考えられます。人類が生まれる前から存在する自然の全てを今一度、見つめ直すことで、多くの価値を発見し、それを守り伝える役目を担う中で、自然や歴史と共生できるツアー、自分自身を振り返り次へと向かうエネルギーに変えることができると思います。期待値を超えるツアーで感動していただき、その感動が人に伝える力となる。

自然の恵みが溢れ、古くからの歴史が積み重なる名張は、多くの宝の原石が埋まっていると感じました。